

サブシステムに着目した家族機能と アダルトチルドレン傾向との関連について

井村 文音*・松下 姫歌**

Recognition of Family Functions and Adult Children Tendencies
—Focusing on Family Subsystems—

Ayane Imura* & Himeka Matsushita**

This research aims at empirically examining the linkage between the acknowledgement of a family subsystems' functional status and tendencies in adult university student children. It focuses on the status of family functions, particularly those of family subsystems. In doing so, the study also identifies similarities in the recognition of family functions and the functional status of family subsystems. The result shows that the functions acknowledged within the family as a whole and in the family subsystem are different. In other words, while the recognition of family functions and status were common among parents, these aspects were not recognized in adult children. In addition, the study elucidates the relationship between the recognition of rules and lack of self-control in parent-child relationships. Moreover, it suggests a connection between a sense of self-condemnation and father-child relationships. Thus, the characteristics of relationships observed in family functions and the tendencies of adult children differ depending on the level of recognition within a family system or subsystem.

Key words: family function, family subsystem, adult children tendency

問題

家族療法の理論・方法が発展する中で、1960～1970年代には一般システム理論(von Bertalanffy,1968)を取り入れたシステムズアプローチが重視されてきた。システムズアプローチとは、一般システム理論に基づく、生命・生活・行動・社会にある有機的な諸特徴を見つめ、生活体・心理・社会の諸機能についての理解、説明、予測、制御を進める見方である(横山・佐藤,2006)。代表的なものに Minuchin (1974) の構造的家族理論(structural family theory)がある。この理論では、家族サブシステム間の明確性である「組織性」、環境的な脈

*広島大学教育学研究科 **京都大学教育学研究科

絡と個人の行動との関わりである「交互作用のパターン化」、状況に適応的か、構造を硬化させるかという「ストレスに対応する反応」の3点に着目している。ここでの組織性とは、システムの構成要素は、一定の法則の中で機能しているという概念であり、サブシステムという階層性と境界のことを指す。

家族のサブシステム (Minuchin,1974) とは、世代、性、関心、機能などによって形成されるものであり、各個人を始め、夫婦や母子などの二人組もサブシステムと成り得る。家族成員の各人は様々なサブシステムに属し、そこで様々な能力を身につけ、人間の交流を可能にする相互性を得ていく。そして、サブシステム間には、サブシステムの区別を守る機能をもつ境界が存在する。サブシステムは分化していないと、問題を自律的に探究し、解決する力を失うことになる。境界があいまいであれば、ストレスの多い状況に適応し変化するために必要な資源が乏しくなる。逆に、境界が硬直していれば、サブシステムは乖離状態となり、サブシステム間のコミュニケーションは困難になるとされる。Minuchin (1974) は「家族システムはサブシステムを通して機能を遂行する」と述べている。そのため、家族の機能を捉えるにあたって、家族全体だけでなく家族サブシステムにも着目する必要があると考えられる。

1980年代以降には、これまでの家族療法の理論を統合する形で Olson, Sprenkle, & Russell (1979) の家族円環モデル理論 (Circumplex Model) が登場した。家族円環モデルは、家族成員間のきずな (cohesion) とかじとり (adaptability) の2次元を組み合わせて、家族の機能度を知るための家族システムの機能モデルである (横山・橋本・栗本・立木,1997)。きずなとは、家族の凝集性のことであり、操作的概念は「情緒的結合、家族相互作用への関与の度合い、夫婦関係、親子間の連合、内的境界 (時間・空間・意志決定)、外的境界 (友人・趣味・余暇活動)」である (横山他,1997)。かじとりとは、内的・外的な圧力に対する家族の変化の柔軟性のことであり、操作的概念は「リーダーシップ、しつけ、問題解決の相談、役割関係、きまり」である (横山他,1997)。家族円環モデルでは、これらの2次元を4レベルに分け、16タイプに分類し、家族の機能状態を測定する (Figure.1)。きずな・かじとりの両次元とも、中間に近づくほど家族機能の健康度が高く、極端に近づくほど病理度が高まるというカーブリニア性が仮説とされている (横山他,1997)。また、これらの家族機能バランスを安定へ促進する要素に「コミュニケーション」がある (岡堂,1990)。

Olson, Portner, & Bell (1982) は、家族円環モデル理論に基づいて家族機能の測定及び評価をするための自己報告式質問紙 FACES (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale) を作成した (立木,1999)。Olson の家族円環モデルを用いて家族機能を測定している研究は日本でも多く見られる。草田・岡堂 (1993) のように、FACES シリーズの翻訳版や、立木 (1999) のグループのように、家族円環モデルに基づいた独自の尺度である FACESKG シリーズの開発が行われてきた。

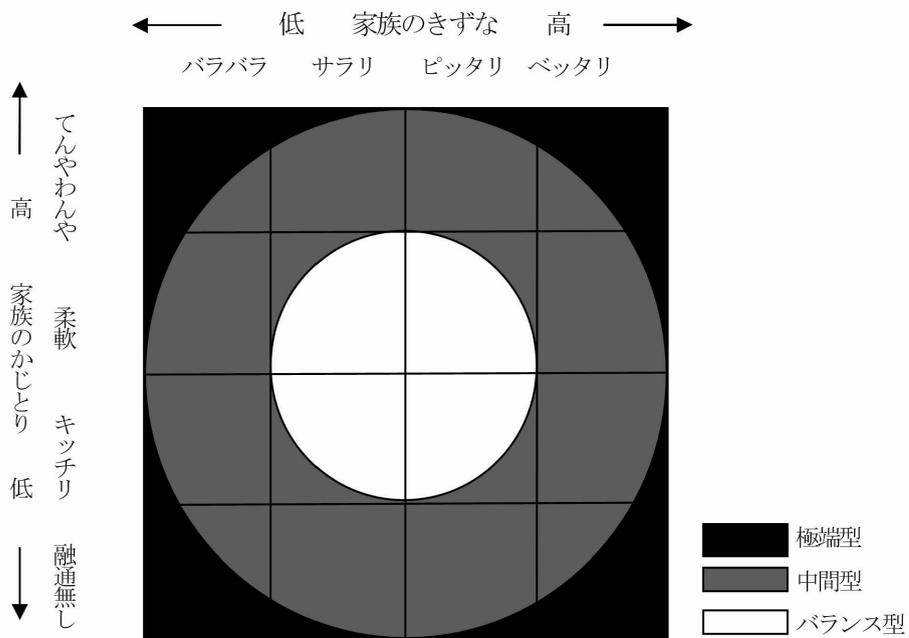


Figure.1 円環モデル(Olson, Sprenkle,&Russell,1979, 栗本(1999)より引用)

しかし茂木 (1996) は、これまでに提唱された健康な家族の概念モデルが米国の家族を中心に開発されてきた点から、文化や習慣の違う日本の家族への適応に関して疑問を呈した。茂木 (1996) は、Walsh (1982) が挙げた健康な家族の基準である a) 症状のない家族, b) 最適に機能している家族, c) 平均的に機能している家族, d) 家族内の相互作用によって家族ライフサイクルに適応的に変化できる家族のうち、日本の家族の特徴にも当てはまるものは a), b), d) であるとした。しかし、これまでの日本の健康な家族に関する研究では、家族の健康性の特徴を挙げているに過ぎず、その特徴の関連性については検討していないと述べている。茂木 (1996) は、大学生を対象に、「健康な家族」の概念についての自由記述調査を行い、Walsh(1982) の健康な家族の基準に基づいて整理した。その結果、肯定的・理想的な特徴を持つ、最適に機能している家族についての言及が多く得られ、自立や自主性・尊重・プライバシーという「個別性」、理解・信頼・サポートという「相互性」、率直・明確性という「コミュニケーション」、まとまり・団結という「凝集性」のほか、「お互いある程度の距離をもつ」など、成員間の実際的な距離である「距離」、明るい、仲が良い、笑いがあるなど、家族の状態を示す「家族の雰囲気」にまとめることができた。これらの概念の中から、健康な家族の手がかりとなる中心の変数を抽出することで、「肯定的家族観」、「役割・きまり」、「問題解決」を健康な家族を捉える 3 つの中心の変数とする、健康な家族変数を構成する項目 (茂木,1996) が作成された。このうち「肯定的家族観」は、「凝集性」、「相互・個別性」、「コミュニケーション」、「雰囲気」の下位概念から構成され、「家族内のコミュニケーション」、「家族に対する評価」、「家族の凝集性」に近い概念を含んでいた。茂木 (1996) の尺度項目は、Olson et al (1979) の家族円環モデル理論のようなカーブリーニア仮説ではなく、日本の家族の特徴である肯定的・理想的な特徴を持つ、最適に機能している家族の特徴を測定するものである。

家族の機能状態は、子どもの抑うつ感、神経症的傾向、青年期の不安状態など、家族成員の中でも特に子どもの精神的健康との関連性が指摘されている(西出・夏野,1997; 鈴木・徳田,2009; 高橋,1998)。また、家族機能と関連のある知見に、アダルトチルドレン (Adult Children, 以下 AC) がある。AC とは、疾病概念ではなく、1980 年代の米国で、アルコール依存症の治療現場で生まれた用語であり、アルコール依存症の親を持ち成人した人たちの事を指す概念である(中山・佐野,1998)。これまでに AC に関しての単一の定義付けはされていないが、もともとは、「アルコール依存症の親元で育ち、成人した人」という意味である(信田,1997)。また斎藤 (1996) は、親が子どもに与えるストレスは、アルコール依存症に由来するものだけではないため、AC は「親との関係で何らかのトラウマを負ったと考えられる成人」とも定義できるとしている。信田 (1997) の定義では、1) 親との関係：自分の生きづらさを、自分自身や社会に帰するのではなく、親との関係に起因すると認める、2) 起因する：自分の苦しみの背景として「親との関係」を一つの要因とし、主要な要因と考えること、3) 認めた人：自分の生きづらさを辿ると、親との関係に行き着く、と自らが認めた人が AC である、の 3 点に着目している。ただし AC は自己認知の問題であり、診断的に与えられる言葉ではない (信田,1997)。

AC の臨床的印象として、4つの基本的な役割と行動パターン(英雄・スケープゴート・見失われた子ども・マスコット)が挙げられている (中山・佐野,1998)。英雄は、彼ら自身の欲求よりも他者の欲求を優先させ、彼ら自身とその家族への良い意味での注目を獲得する。スケープゴートは、関心を引くために、好ましくない行動 (非行、薬物の使用、学校からのドロップアウトなど) をとる。そして、家族の関心を自身の悪い行動に集める。失われた子どもは、ひっそりと一人でいて、良いことにも悪いことにも関わらず、家族に問題を生じさせることを避けようとする。マスコットは、注目の的となり、家族内のおどけものとして振る舞うことで、家族が抱える諸問題から家族成員の目をそらさせる傾向にある。ただし、これらに関してはいずれも妥当性や信頼性を確認した研究は少なく、臨床経験も十分には確認されていない (中山・佐野,1998)。また、AC が育つ家族には、4つのルールがある (緒方,1996)。1つ目は、家族の問題を認めない「否認」である。そのため、正常と異常の判断がつかなくなり、最後には自分の感情も否定してしまうことになる。2つ目は、予測できない事態に対して家族は心を閉ざし、構えてしまう「硬直性」である。そのため、子どもの感情は乏しくなり育たなくなる。3つ目は、悪い出来事やその時の感情を、誰にも、家族同士にも話さない「沈黙」である。4つ目は、問題が他の人に知られないように、家族外の他者と交わらないようになる「孤立」である。そのため、人間同士の親密性が育たなくなる。

家族機能と AC の関連を見た先行研究には、Woititz (1983) の挙げた 13 の AC の心理的特徴と、機能不全家族尺度との関連を見た研究がある(笹野・塚原,1998)。しかし、笹野・塚原 (1998) では家族機能状態には有意な関連が見られなかったため、諸井 (2007) は、笹野・塚原 (1998) の使用した AC 尺度のダブルワーディングの問題や極端な表現に着目し、新たに AC 傾向尺度を作成して家族機能との関連を調べた。AC 傾向尺度は、Woititz (1983) の AC の特徴に、一般健常青年がどの程度当てはまるかを測定するものであり、「自信の欠如・統制感の欠如・対人的不調和」の 3 つの下位因子で構成される。諸井 (2007) では、1) 家族成員間の凝集性の高さは、自分自身に対する肯定的評価を育み、AC 傾向を抑制すること、2) コミュニケーションが乏しい家族は、親密な関係が築けないという、一般的な対人関係形成のリスクを持つこと、3) 柔軟性に乏しい家族は、状況に対する柔軟性も喪失し、変化する状況に対して、自分の判断が持てず成り行きに任せるようになる、などの点が考察された。しかし、家族機能と AC の関連について検討した研究は少なく、特に家族サブシステムとの関連は

検討されていない。神経症的傾向や不安など、家族成員の心理と家族機能・家族サブシステムとの関連が見られているように、ACについても、家族機能、特に家族サブシステムとの関連を検討する必要があると考えられる。

目的

家族機能は、家族サブシステムを通してその機能を遂行する (Minuchin,1974) ため、諸井 (2007) のように、家族全体としての機能と AC 傾向との関連があるならば、家族サブシステムと AC 傾向にも関連があると考えられる。また本研究では、家族サブシステムの機能を測定するために、茂木 (1996) の「健康な家族変数に関する項目」の記述を一部変更して新たに尺度を作成することとした。茂木 (1996) の質問紙は、家族サブシステムの機能状態を測定するために、本来の記述を一部変更しても元々の項目文の意味内容が変わることなく伝えられるので、利用することとした。そのため、新たに作成した家族サブシステムの関係尺度が、本来の家族機能を測定するための役割を果たすのか検討する必要があると考えられる。

そこで、家族機能、特に家族サブシステムの機能に着目して、大学生の AC 傾向と、家族全体の機能および、両親関係・父子関係・母子関係の 3 つの家族サブシステムにおける機能との関連性を検討すること、その際に使用した家族関係尺度と家族サブシステム関係尺度の下位因子を調べ、それぞれの関連性を検討することを本研究の目的とする。

方法

1. 調査対象者

大学生 166 名(男性 58 名, 女性 104 名, 不明 4 名)であった。調査対象者の平均年齢は 19.77 歳($SD=0.86$)、また、男女別の平均年齢は、男性が 19.84 歳($SD=1.04$)、女性が 19.73 歳($SD=0.74$)であった。なお、質問紙の回答に当たって、現在の両親関係、親子関係の想起が困難な場合、調査対象とならないことを質問紙の表紙に記載し、さらに教示として回答前に口頭でも伝えた。

2. 手続き

本調査は集団法による質問紙調査の形式で行った。質問紙配布時の教示において、「現在のあなたの両親関係や親子関係を想起することが困難な場合は、調査対象とならない」ことを伝え、回答を控えさせた。また、質問紙に出てくる「家族」という言葉は、調査対象者本人とその両親の 3 者を指すことを伝えた。

3. 質問紙

質問紙は、家族関係尺度・家族サブシステム関係尺度 (両親関係尺度・父子関係尺度・母子関係尺度)、AC 傾向尺度の 5 尺度の構成とした。家族関係尺度、家族サブシステム関係尺度には、茂木(1996)の「健康な家族機能を構成する項目」を使用した。この尺度は子ども (大学生) の目線から家族機能を捉えるために作成され、また、本研究では家族サブシステムの機能状態を問うために一部記述を変更したが、項目文の意図が変わらずに伝わり、家族機能の測定は可能であると判断したため、本調査でも使用することとした。

家族サブシステム関係尺度 (両親関係尺度・父子関係尺度・母子関係尺度) は、茂木(1996)の「健康な家族機能を構成する項目」の 42 項目を、2 者間に問う形に記述を変更したものを使用した。変更の仕方として、茂木

(1996)において「家族」とされている個所を、両親関係尺度では「父と母」、父子関係尺度では「私と父」、母子関係尺度では「私と母」という形に変更した。ただし 42 項目のうち、2 者間について問う形では質問意図が伝わらない項目、また、家族間と 2 者間とでは文章の解釈が異なる項目の計 11 項目は採用しないこととした。そして、同様の 31 項目を家族関係尺度として使用し、変更後の質問項目が、本来の家族機能を測る尺度として損なわれていないかを判断した。家族関係尺度・家族サブシステム関係尺度の質問項目はそれぞれ 31 項目 5 件法であった。

AC 傾向尺度は、諸井 (2007) と同様の質問紙を使用した。質問紙は 18 項目 4 件法であった。この尺度の教示には、諸井 (2007) 同様、調査対象者のこの 6 ヶ月間の周りとの人間関係や自分の気持ちについて回答するように示した。

結果

1. 尺度の因子分析

全ての尺度に関して因子分析を行うために、家族関係尺度、家族サブシステム関係尺度 (両親関係尺度・父子関係尺度・母子関係尺度)、AC 傾向尺度の全ての尺度項目において、平均値、標準偏差を求め、天井効果、フロア効果を調べた。いずれの尺度項目においても天井効果、フロア効果は見られなかった。

家族関係尺度の 31 項目に対して、主因子法 Promax 回転の因子分析を行ったところ、十分な因子負荷量を示さなかった項目と、二重負荷を示した項目の 10 項目を除き、21 項目が 3 因子で得られた。第 1 因子は 8 項目で構成され、家族成員の個別性の重視や家族成員間のコミュニケーションを示す「柔軟性・コミュニケーション」因子 ($\alpha=.86$)、第 2 因子は 9 項目で構成され、家族内の雰囲気や成員間の協力・団結を示す「凝集性・雰囲気」因子 ($\alpha=.89$)、第 3 因子は 4 項目で構成され、家族内の決まりに関する「決まり」因子 ($\alpha=.88$) と名付けた。なお、この結果は、茂木(1996)の結果とは異なり、茂木 (1996) で得られた「肯定的家族観」因子は「柔軟性・コミュニケーション」因子と「凝集性・雰囲気」因子に分かれ、また、「問題解決」因子は本研究では抽出されなかった。

両親関係尺度の 31 項目に対して、主因子法 Promax 回転の因子分析を行ったところ、十分な因子負荷量を示さなかった項目と、二重負荷を示した項目の 5 項目を除き、26 項目が 2 因子で得られた。第 1 因子は 22 項目で構成され、両親間の仲の良さ、個別性、雰囲気などを示す「凝集性・柔軟性(両親)」因子 ($\alpha=.89$)、第 2 因子は 4 項目で構成され、家族内の決まりに関する「決まり」因子 ($\alpha=.80$) と名付けた。両親関係尺度では、家族関係尺度の「柔軟性・コミュニケーション」因子と「凝集性・雰囲気」因子とほぼ同様の項目が 1 つの因子にまとまった。また、「決まり」因子に関しては、家族関係尺度と同様の項目が抽出された。茂木 (1996) で得られた「問題解決」因子は、家族関係尺度と同様、本研究では抽出されなかった。

父子関係尺度の 31 項目に対して、主因子法 Promax 回転の因子分析を行ったところ、十分な因子負荷量を示さなかった項目と、二重負荷を示した項目の 3 項目を除き、28 項目が 3 因子で得られた。第 1 因子は 20 項目で構成され、父子間の仲の良さ、雰囲気やお互いの個性を認め合う内容を示す「凝集性・柔軟性(父子)」因子 ($\alpha=.96$)、第 2 因子は 4 項目で構成され、家族内の決まりに関する「決まり(父子)」因子 ($\alpha=.79$)、第 3 因子は 4 項目で構成され、問題解決や父子間における葛藤に関する「問題・葛藤(父子)」因子 ($\alpha=.70$) と名付けた。父子関係尺度では、両親関係尺度とほぼ同様の項目から成る「凝集性・柔軟性(父子)」因子と、家族関係尺度・両親関係尺度

と同様の項目から成る「決まり(父子)」因子が抽出された。また、家族関係尺度・両親関係尺度では得られなかった「問題・葛藤(父子)」因子が新たに得られた。この因子は、茂木(1996)で得られた「問題解決」因子の3項目と、家族関係尺度の「柔軟性・コミュニケーション」因子に含まれた「家族に心を打ち明けると嫌な気分になる」の4項目で構成され、因子負荷量は4項目とも負の値で示された。

母子関係尺度の31項目に対して、主因子法 Promax 回転の因子分析を行ったところ、二重負荷を示した項目の1項目を除き、30項目が3因子で得られた。第1因子は21項目で構成され、母子間の仲の良さ・雰囲気やお互いの個性を認め合う内容の「凝集性・柔軟性(母子)」因子 ($\alpha=.94$)、第2因子は5項目で構成され、問題解決や母子間における葛藤に関する「問題・葛藤(母子)」因子 ($\alpha=.81$)、第3因子は4項目で構成され、家族内の決まりに関する「決まり(母子)」因子 ($\alpha=.82$) と名付けた。母子関係尺度では、両親関係尺度・父子関係尺度とほぼ同様の項目から成る「凝集性・柔軟性(母子)」因子と、家族関係尺度・両親関係尺度・父子関係尺度と同様の項目から成る「決まり(母子)」因子が抽出された。また、父子関係尺度とほぼ同様の項目から成る「問題・葛藤(母子)」因子が抽出された。

AC 傾向尺度の18項目に対して、主因子法 Promax 回転の因子分析を行ったところ、十分な因子負荷量を示さなかった項目と、二重負荷を示した項目の6項目を除き、12項目が3因子で得られた。第1因子は5項目で構成され、他人や状況になじめない、自分の考えに自信が持てないという「対人的不調和・自信の欠如」因子 ($\alpha=.80$)、第2因子は3項目で構成され、自分に対する適切な統制が出来ないという「自己統制感の欠如」因子 ($\alpha=.75$)、第3因子は4項目で構成され、自己への評価を求めたり、強い自責や自己嫌悪に陥るといった「自責感」因子 ($\alpha=.71$) と名付けた。この結果は諸井(2007)とは異なり、本研究では、諸井(2007)で得られた「自信の欠如」、「統制感の欠如」、「対人的不調和」の項目が各因子に混在する形となっていたため、諸井(2007)の項目名を参考に、「対人的不調和・自信の欠如」因子、「自己統制感の欠如」因子、「自責感」因子と名付けた。なお、「自責感」因子の項目は、諸井(2007)では「自信の欠如」因子に含まれていた。

2. 家族関係尺度と家族サブシステム関係尺度の相関分析

本研究で使用した家族関係尺度と家族サブシステム関係尺度が、同じ家族機能を測定する尺度であるかどうかを検討するために、Pearson の積率相関係数を算出し、家族関係尺度と家族サブシステム関係尺度の相関を調べた。

家族関係尺度と両親関係尺度では、家族関係尺度の「決まり」因子と、両親関係尺度の「決まり」因子に有意な正の相関が見られた ($r=.973$)。その他の因子間には有意な相関は見られなかった(Table 1)。家族関係尺度と父子関係尺度では、家族関係尺度の「凝集性・雰囲気」因子と、父子関係尺度の「決まり(父子)」因子に有意な正の相関が見られた($r=.965$)。その他の因子間には有意な相関は見られなかった (Table 2)。家族関係尺度と母子関係尺度の因子間には有意な相関は見られなかったが、母子関係尺度の「凝集性・柔軟性(母子)」因子と「問題・葛藤(母子)」因子の間に、有意な負の相関が見られた ($r=-.892$) (Table 3)。

Table 1 家族関係尺度と両親関係尺度の相関係数

	柔軟性・コミュニケー ション	凝集性・雰囲気	決まり(家族)	凝集性・柔軟性	決まり(両親)
凝集性・雰囲気	.677				
決まり(家族)	-.220	-.126			
凝集性・柔軟性	.049	.052	.378		
決まり(両親)	-.016	.025	.973*	.506	

*. p<.05

Table 2 家族関係尺度と父子関係尺度の相関係数

	柔軟性・コミュニ ケーション	凝集性・雰囲気	決まり(家族)	凝集性・柔軟性	決まり(父子)	問題・葛藤
凝集性・雰囲気	.677					
決まり(家族)	-.220	-.126				
凝集性・柔軟性	.094	-.348	-.057			
決まり(父子)	.933	.965*	-.380	-.643		
問題・葛藤	-.653	-.847	-.368	.842	-.686	

*. p<.05

Table 3 家族関係尺度と母子関係尺度の相関係数

	柔軟性・コミュニ ケーション	凝集性・雰囲気	決まり(家族)	凝集性・柔軟性	決まり(母子)	問題・葛藤
凝集性・雰囲気	.677					
決まり(家族)	-.220	-.126				
凝集性・柔軟性	.523	-.037	-.431			
決まり(母子)	.755	.945	-.031	.131		
問題・葛藤	-.831	-.693	.542	-.892*	-.481	

*. p<.05

3. 家族関係尺度・家族サブシステム関係尺度とAC傾向尺度の相関分析

家族機能・家族サブシステムの機能の状態と大学生のAC傾向の関連を検討するために、Pearsonの積率相関係数を算出し、家族関係尺度、家族サブシステム関係尺度とAC傾向尺度の相関を調べた。

家族関係尺度とAC傾向尺度では、家族関係尺度の「決まり」因子と、AC傾向尺度の「自己統制感の欠如」因子に有意な正の相関が見られた($r=.997$)。その他の因子間には有意な相関は見られなかった(Table 4)。両親関係尺度とAC傾向尺度では、両親関係尺度の「決まり」因子と、AC傾向尺度の「自己統制感の欠如」因子に有

意な正の相関が見られた ($r=.998$)。その他の因子間には有意な相関は見られなかった (Table 5)。父子関係尺度と AC 傾向尺度では、父子関係尺度の「問題・葛藤(父子)」因子と、AC 傾向尺度の「自責感」因子に有意な正の相関が見られた($r=.964$)。その他の因子間には有意な相関は見られなかった (Table 6)。母子関係尺度と AC 傾向尺度では、因子間に有意な相関は見られなかった (Table 7)。

Table 4 家族関係尺度と AC 傾向尺度の相関係数

	柔軟性・コミュニケーション	凝集性・雰囲気	決まり	対人的不調和・ 自信の欠如	自己統制感の 欠如	自責感
凝集性・雰囲気	.677					
決まり	-.220	-.126				
対人的不調和・自信の欠如	.461	-.134	-.164			
自己統制感の欠如	-.678	-.341	.997*	.517		
自責感	-.495	-.690	-.602	.127	-.576	

*. $p < .05$

Table 5 両親関係尺度と AC 傾向尺度の相関係数

	凝集性・柔軟性(両親)	決まり	対人的不調和・ 自信の欠如	自己統制感の欠如	自責感
決まり	.506				
対人的不調和・自信の欠如	-.439	-.370			
自己統制感の欠如	.105	.998*	.517		
自責感	.082	-.664	.127	-.576	

*. $p < .05$

Table 6 父子関係尺度と AC 傾向尺度の相関係数

	凝集性・柔軟性 (父子)	決まり(父子)	問題・葛藤(父子)	対人的不調和・ 自信の欠如	自己統制感の 欠如	自責感
決まり(父子)	-.643					
問題・葛藤(父子)	.842	-.686				
対人的不調和・自信の欠如	-.072	-.228	.099			
自己統制感の欠如	-.148	-.574	-.300	.517		
自責感	.741	-.479	.964*	.127	-.576	

*. $p < .05$

Table 7 母子関係尺度とAC傾向尺度の相関係数

	凝集性・柔軟性 (母子)	決まり(母子)	問題・葛藤(母子)	対人的不調和・ 自信の欠如	自己統制感の 欠如	自責感
決まり(母子)	.131					
問題・葛藤(母子)	-.892*	-.481				
対人的不調和・自信の欠如	.237	-.043	.032			
自己統制感の欠如	-.981	.953	-.093	.517		
自責感	.121	.079	-.778	.127	-.576	

*. $p < .05$

考察

本研究では、独自に家族サブシステム関係尺度（両親関係尺度・父子関係尺度・母子関係尺度）を作成したため、家族サブシステム関係尺度が家族関係尺度と同様の家族の機能状態を測定しているかを調べるために、家族関係尺度と家族サブシステム関係尺度の関連性を検討した。そして、家族サブシステムに着目した家族機能や役割に、AC傾向と関連があるかどうかを検討することを目的とした。

1. 家族関係尺度の因子分析

家族関係尺度では、茂木（1996）では「肯定的家族観」尺度として1つにまとまっていた因子が、本研究では「柔軟性・コミュニケーション」、「凝集性・雰囲気」と2分されて抽出された。Olsonの家族円環モデル理論によると、きずな(家族の凝集性)の操作的概念は「情緒的結合、家族相互作用への関与の度合い、夫婦関係、親子間の連合、内的境界(時間・空間・意志決定)、外的境界(友人・趣味・余暇活動)」であり、かじとり(家族の変化の柔軟性)の操作的概念は「リーダーシップ、しつけ、問題解決の相談、役割関係、きまり」とされている(横山ら,1997)。このことから、本研究で得られた「柔軟性・コミュニケーション」因子と「凝集性・雰囲気」因子は、家族関係を測定する尺度として利用可能であると考えられる。一方、茂木（1996）の「問題解決」因子は本研究では見られなかった。これについて茂木（1996）は、日本の家族では潜在的にはあってもはっきりとは表れない家族機能ではあるが、健康な家族を捉える上での必要性から質問項目として加えたと述べている。このことから、本研究で「問題解決」因子が得られなかったのは、調査対象者の家族機能に対する認識として、「問題解決」が顕在的に現れなかったことが理由として考えられる。

2. 両親関係尺度の因子分析

両親関係尺度では、家族関係尺度の因子分析の結果とほぼ同じ項目の「凝集性・柔軟性(両親)」因子と、家族関係尺度と同様の項目の「決まり」因子が抽出された。家族関係尺度とは異なり、「柔軟性・コミュニケーション」、「凝集性・雰囲気」因子が1つとなって抽出された。両親関係とは、調査対象者本人を含まない家族サブシステムであるため、調査対象者本人を含む家族全体のシステムとは機能状態の認識が異なると考えられる。本研究では、調査対象者は家族システムにおける「子ども」の立場なので、両親関係の機能状態は、必然的に客観的

な認識となる。両親関係尺度の「凝集性・柔軟性(両親)」因子は、項目内容は家族関係尺度で得られた「柔軟性・コミュニケーション」、「凝集性・雰囲気」因子とは類似しているが、捉えている側面は異なると考えられる。

3. 父子関係尺度の因子分析

父子関係尺度では、両親関係尺度とほぼ同様の項目の「凝集性・柔軟性(父子)」因子と、家族関係尺度・両親関係尺度と同様の項目の「決まり(父子)」因子が抽出された。また、家族関係尺度・両親関係尺度には見られなかった「問題・葛藤(父子)」因子が新たに抽出された。この因子には、家族関係尺度では因子分析の段階で削除された、茂木(1996)の「問題解決」因子の3項目と、家族関係尺度の「柔軟性・コミュニケーション」因子に含まれた「家族に心を打ち明けると嫌な気分になる」という項目で構成された。父子関係尺度では、この「家族に心を打ち明けると嫌な気分になる」という質問文を父子間に当てはまるように文章を書き換え、「私と父は、お互いに心を打ち明けると嫌な気分になる」という質問文としたため、「嫌な気分」という表現が父子間における葛藤に該当したと考えられる。家族関係尺度・両親関係尺度では見られなかった「問題・葛藤(父子)」因子が新たに抽出されたことに関して、家族システム全体に関する認識の仕方と、家族サブシステムの2者関係に着目した認識の仕方が少し異なるということが考えられる。また、家族サブシステムでも、調査対象者本人を含むか否かによって2者間に存在する問題や葛藤の認識が可能な場合と不可能な場合があると考えられる。両親関係に存在する問題や葛藤を客観的に認識するのは困難であるが、父子関係は調査対象者本人を含む家族サブシステムであるため、調査対象者本人に関わる父親との問題や葛藤への認識は可能となると考えられる。

4. 母子関係尺度の因子分析

母子関係尺度では、両親関係尺度・父子関係尺度とほぼ同様の項目の「凝集性・柔軟性(母子)」因子と、家族関係尺度・両親関係尺度・父子関係尺度と同様の項目の「決まり(母子)」因子が抽出された。また、家族関係尺度・両親関係尺度には見られなかった、父子関係尺度とほぼ同様の項目の「問題・葛藤(母子)」因子が抽出された。母子関係も父子関係と同様に、調査対象者本人を含む家族サブシステムであるため、調査対象者本人に関わる母親との問題や葛藤への認識は可能であるため、この因子が抽出されたと考えられる。

家族関係尺度と家族サブシステム関係尺度では因子構造が異なったことから、家族サブシステムは、家族システムの機能と類似した側面もあれば、家族サブシステムに独自の機能も持っていると言える。しかし本研究では、家族システムにおける子どもを調査対象者としたため、家族関係、両親関係、父子関係・母子関係によって機能状態の認識の仕方が異なったとも考えられる。家族関係は、調査対象者本人を含んでいるが、全体の機能状態を認識するという点で客観的な認識となる。両親関係は、調査対象者を含まない関係であるため、機能状態の認識は客観的となる。また、父子関係・母子関係は、調査対象者を含む関係であるため、機能状態の認識は主観的なものとなったと考えられる。

5. 家族関係尺度と家族サブシステム関係尺度の相関分析

家族関係尺度と家族サブシステム関係尺度の相関分析の結果から、家族サブシステムによって、家族関係尺度との相関の仕方が異なることが明らかとなった。

家族関係尺度の「決まり」と両親関係尺度の「決まり」に、有意で強い正の相関($r=.973$)が見られたことか

ら、家族関係における「決まり」と、両親関係における「決まり」は、近いものとしてイメージされていると言える。つまり、家族内のルールと両親間におけるルールは、子どもにとってはほぼ同様のものとして認識される。同様の有意な相関が父子関係・母子関係には見られなかったのは、両親関係が調査対象者自身を含まない、客観的な認識の家族サブシステムであり、父子関係・母子関係は、調査対象者自身を含む主観的な認識の家族サブシステムであるという違いから、家族サブシステムへの認識の仕方が異なると考えられる。また、家族関係尺度の「凝集性・雰囲気」因子と、父子関係尺度の「決まり(父子)」因子に有意で強い正の相関($r=.965$)が見られたことから、家族全体の絆や雰囲気と父子関係におけるルールに関連があると言える。子どもにとって、家族の絆や雰囲気が良好であるという認識と、父子間のルールがしっかりしているという認識に関連があると言える。両親関係・母子関係には同様の有意な相関は見られず、家族の絆や雰囲気は、両親関係や母子関係ではなく父子関係と関連があり、青年期における父子関係の機能状態の重要性を示唆する結果となった。一方、家族関係と母子関係の機能状態の認識には関連がなかった。しかし、母子関係には、「凝集性・柔軟性(母子)」因子と「問題・葛藤(母子)」因子の間に有意な負の相関($r=-.892$)が見られ、このような相関は父子関係には見られなかった。父子間のルールは家族の絆や雰囲気に関連していると認識されるが、母子間の問題や葛藤は、家族の機能状態には関連しておらず、母子間における絆や雰囲気、役割の柔軟性と関連していると認識されていた。このことから、青年期の父子関係と母子関係の機能状態の認識の仕方には明らかな違いがあると言える。

6. 家族関係尺度・家族サブシステム関係尺度とAC傾向尺度の相関分析

家族関係尺度、家族サブシステム関係尺度とAC傾向尺度の相関を検討した結果、家族関係、家族サブシステム関係機能状態の認識とAC傾向に部分的に関連があることが明らかとなった。

家族関係尺度、両親関係尺度の「決まり」とAC傾向尺度の「自己統制感の欠如」に有意で強い正の相関が見られた($r=.997$)。この結果は、「固定化した舵取り」の「統制感の欠如」への影響が見られたという諸井(2007)の結果を支持しており、AC傾向の「自己統制感の欠如」の側面が、家族機能の柔軟性の中でも特に「決まり」に関連すると言える。家族関係、両親関係にルールが定まっているという認識が強くなると、そのルールに依存してしまうために、自己統制感が欠如していると感じる傾向があると考えられる。または、自己統制感が欠如しているために、家族や両親間のルールに依存してしまう傾向があるとも考えられる。しかしこの点に関して、自己統制感が低い子どもがいる家族では、家族全体や両親間のルールが子どもにとって依存できるものとして機能するという事も考えられる。また、父子関係尺度の「問題・葛藤(父子)」因子とAC傾向尺度の「自責感」因子に強い正の相関($r=.964$)が見られた。このことから父子間に問題や葛藤があると認識すると、その責任は自分自身にあると考えてしまう傾向が強くなる可能性がある。逆に、子ども本人の自責感が強いために、父子間の問題や葛藤に意識が向くとも考えられる。一方、母子関係尺度とAC傾向尺度の間には有意な相関は見られなかった。このことから、自記式の質問紙で測定する意識レベルでの母子関係とAC傾向は関係を持たないと言える。父子間にはAC傾向との関連が見られ、母子間には同様の相関が見られなかったことは、親子間でも父子間と母子間ではサブシステム関係への認識の違いがあるという点で特徴的であり、青年期の子どもにとっての父子関係と母子関係に対する認識の仕方が異なっていると言える。

7. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、家族内における子どもの立場からの、家族システムや家族サブシステムへの認識の仕方が異なっていることが明らかとなった。特に、家族全体への認識と両親関係への認識の類似点、父子関係への認識と母子関係への認識の相違点が、本研究では非常に特徴的であったと言える。家族サブシステムには、両親関係・親子関係という形が、また、親子関係の中にも父子関係・母子関係というように、様々な家族サブシステムの形が存在する。家族サブシステムは、家族システムの一部ではあるが、そのシステムの機能状態を認識する人物の視点によって、認識の仕方がずれてしまう。今後、家族サブシステムの機能状態を検討する際には、認識する人物の視点を考慮する必要がある。また、家族関係と子どものAC傾向、父子関係と子どものAC傾向に関連があることが明らかとなった。AC傾向のある子どもにとっての家族内のルールの意味合いについては今後検討していく必要がある。また、父子関係に関連が見られ、母子関係には関連が見られなかった点は特徴的であったと言える。家族機能や子どもの心理的特徴を捉える際に、父子関係は重要な観点になると言える。本研究では家族機能への認識とAC傾向の関連性のみを検討したので、今後は家族機能への認識とAC傾向の因果関係についても検討していく必要がある。

引用文献

- 栗本かおり (1999). Olson の円環モデルに基づく家族機能度測定尺度作成の試み 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 2 (1), 51-59.
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993). 家族関係査定法 岡堂哲雄 (編) 心理検査学 垣内出版 573-581
- Minuchin, S. (1974). *Families and family therapy* Boston: Harvard University Press, (山根常男(監) 家族と家族療法 誠信書房)
- 茂木千明 (1996). 家族の健康性に関する一研究——大学生の子どもの観点から—— 家族心理学研究, 10 (1), 47-62.
- 諸井克英 (2007). 家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向 同志社女子大学 学術研究年報, 58, 85-92.
- 中山道規・佐野信也(編) (1998). ACの臨床 星和書店
- 西出隆紀・夏野良司 (1997). 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, 45 (4), 456-463.
- 信田さよ子 (1997). アダルト・チルドレン——私の物語をつくり直す—— 日本家政学会誌, 48 (9), 823-828.
- 緒方 明 (1996). アダルトチルドレンと共依存 誠信書房
- 岡堂哲雄 (1990). 家族臨床心理の理論モデル 岡堂哲雄・鏑幹八郎・馬場禮子 (編) 臨床心理学大系4 家族と社会 金子書房, 44-82.
- Olson, D.H., Sprenkle, D.H. & Russell, C.S. (1979). *Circumplex model of marital and family systems: I. Cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications*. Family Process, 18, 3-28.
- 斎藤 学 (1996). アダルト・チルドレンと家族——心のなかの子どもを癒す—— 学陽書房
- 笹野友寿・塚原貴子 (1998). 大学生の精神保健に関する研究——機能不全家族とアダルト・チルドレン—— 川崎医療福祉学会誌, 8 (1), 47-53.
- 鈴山可奈子・徳田智代 (2009). 夫婦関係および家族システムの機能状態が成年期の不安に及ぼす影響 家族心理

- 学研究, 23 (1), 1-11.
- 高橋直美 (1998). 両親間および親子間の関係と子どもの精神的健康との関連について 家族心理学研究, 12 (2), 109-123.
- 立木茂雄 (1999). 家族システムの理論的・実証的検証——オルソンの円環モデル妥当性の検討—— 川島書店
- Walsh, F.(1982). *Conceptualizations of normal family functioning* Normal family process . New York: Guilford Press, 3-42
- Woititz, J.G. (1983). *Adult children of alcoholics Expanded edition*, Florida:health communication, Inc. (斎藤学(監訳) (1997). アダルト・チルドレン——アルコール問題家族で育った子供たち—— 金剛出版)
- 横山知行・佐藤仁美 (編) (2006). 新訂 家族心理学特論 放送大学教育振興会
- 横山登志子・橋本直子・栗本かおり・立木茂雄 (1997). オルソン円環モデルに基づく家族機能評価尺度の作成——FACESKGIV・実年版の開発 関西学院大学社会学部紀要, 77, 63-84.